大学生の教育ボランティアが教育実践力の育成に及ぼす効果

Effects of Voluntary Activities in Educational Institutions
on the Promotion of Students' Educational Literacy

進藤聡彦* 勢田二郎† 澤登義洋‡
SHINDO Toshihiko SETA Jiro SAWANOBORI Yoshihiro
角田修§
TSUNODA Osamu

要約: 教員養成系学部の学生の教育ボランティア活動が教育実践力の育成にもたらす効果について，学生と受け入れ機関を対象とした２つの質問紙調査を実施した．その結果，教育ボランティアは学生にとって子どもの実態を知る機会になるなど有効な経験になっていること，受け入れ機関にとっても有効な人的資源として捉えられていることなどが明らかになった．併せて今後の課題も明確になった．

キーワード: 教育ボランティア，教育実践力，教員養成系学生

I 問題

近年，教員養成学部では教育実践力の形成のために，従来の教育実習だけでなく主体的に教育現場に参与する機会を設けている．例えば，学生自らが作成した教科の授業やテーマ劇の授業のプランを小学校の異学年集団に実践するもの (盛岡大学, 2007)，複数の大学教員と学生が開発した 11 のプランを学生が関わりながら学校で実践し，実践後にプランの改善を検討するもの (佛教大学, 2007) などの試みがある．教育ボランティアも学生が教育の現場に実践的に関わる機会を与えようとするものである．教育ボランティアとは，教育実習と異なり学生の自発的な意思により，教育の現場で子どもたちの指導に当たる活動である．従来，こうした活動の教育効果は必ずしも明らかにされていない．そこで本稿では山梨大学教育人間科学部で行われている教育ボランティア活動を例に，その効果を明らかにしようとする．

はじめに教育ボランティア活動を設けた経緯について述べたい．山梨大学教育人間科学部では，平成 15 年 3 月に教職に就くことを希望する学生の実践的力量形成のために，教育現場でのボランティア活動を支援する教育ボランティア委員会を立ち上げた．同時期に文部科学省は，いわゆる「ゆとり教育」の反動の形で現れていた学力低下論への対応だと考えられる学力向上のための具体的施策を打ち出した．例えば，平成 14 年度からは学力向上フロンティア事業などが開始された．また，平成 15 年度からは新たに「学習指導カウンセラー」「放課後学生チューター」などを内容とする「学力向上アクションプラン」が実施された．このうち，放課後に学生が児童・生徒の学習援助を行う「放課後学生チューター」の派遣依頼が山梨県教育委員会から山梨大学にあった．立ち上がったばかりの教育ボランティア委員会では,「放課後学生チューター」を学生ボランティアの活動の一環として位置づけ，学生の派遣に対応することとなった．

初年度となった平成 15 年度の「放課後学生チューター」の派遣先は，教育人間科学部のあるＡ市内の小学校 3 校と中学校 1 校であった．急な募集であったにも拘わらず，各校 10〜12 名の合計 40 名

*学校教育講座， †家政教育講座， ‡南アルプス市教育委員会， §附属教育実践総合センター

ほどの学生が参加することとなった．チューターとしての活動は，派遣先の学校の希望により小学校ではいずれも算数の指導補助が中心であったが，コンピュータの指導を求める学校もあった．中学校でも教科の指導補助が中心であったが，それに加えて部活動の指導補助も行った．

実施後の派遣先の「放課後学生チューター」制度や学生への評価は高く，また学生側からも学校現場を知るよい機会になったこと，教えることについての楽しさや厳しさを学んだことなどの感想が得られた．更には，教職への意志を更に固める機会になった旨の声も寄せられた．

文部科学省の施策としての「放課後学生チューター」事業は平成16年度で終了したが，教育ボランティア委員会ではその後も活動の範囲を拡大して継続することとなった．現在ではA市内だけでなく山梨県内のすべての地域の学校の派遣要請に応える努力をしている．なお，平成17年度の教育課程の改訂の折りに，この活動を「社会参加実習」という名称の科目の単位として認めることとなった．その際には，ボランティアの性質上，対価となりうる単位の付与については否定的な意見もあったが，単位化することでボランティア活動に関心を示さない学生にとっても自律的，実践的な学習を開始する契機になり得るのではないかという理由で単位化することとなった．以上の経緯により，現在では山梨県内の広範な地域の学校を含めた数多くの教育機関からの要請に応じて，多くの学生が「教育ボランティア」に参加している．

II　調査 I

目的

教育ボランティア活動を行った学生が具体的にどのような活動に参加したのか，またそうした参加の目的や参加後の感想についての実態を明らかにし，今後の教育ボランティアのあり方を検討する資料を得ることを目的とする．

方法

(1) 調査対象者

教育ボランティアに参加した学生を対象にアンケートに答えるように依頼した．その結果，83名の回答が寄せられた．

(2) 調査内容

無記名の質問紙調査による．実施は2007年10月であった．質問内容はA～Eの5種に分類できるものであり，質問Aは所属・学年・性別などデモグラフィク・データを得るためのものであった．質問Bでは教育ボランティアへの参加動機を尋ねた．質問Cでは教育ボランティアとして実際に行った活動内容を尋ねた．また，質問Dは実施後の感想を尋ね，質問Eでは今後の教育ボランティアへの参加の意思に関わる内容について問うた．質問 B~E の具体的な項目は図1～図4に示す通りである．なお，質問項目は筆者のうちの3名が協議し，作成した．

今回、ボランティアをしようと思った動機についてお聞きします。各項目の最も当てはまる番号に○印を付けて下さい。（注：回答は１：まったくそう思わなかった～４：とてもそう思った、の４件法によった。以下、回答欄は省略）

B-1　将来、教職を希望しており、その役に立つと思ったから
B-2　教員採用試験に有利になるかもしれないと思ったから
B-3　子どもに教えるという経験をしてみたかったから
B-4　子どもと接することが好きだから
B-5　内容はともかく、何かボランティアをしたいと思ったから
B-6　時間をもてあましていたので、何かしようと思ったから
B-7　大学教員から今回のボランティアをするよう勧められたから
B-8　単位が取得できるから
B-9　その他の理由（空欄に理由を書いて下さい）（注：回答欄は省略）

図１　教育ボランティアへの参加動機に関する質問Ｂ

C-1　現在のボランティア先までの主たる交通手段は何ですか（1 つだけ○を付けて下さい）。
①徒歩　②自転車　③バイク　④自動車　⑤公共交通機関

C-2　ボランティアに行く経費（往復）はどれくらいですか（1 つだけ○を付けて下さい）。
①0 円　②500 円まで　③500 から 1000 円　④1000 から 2000 円　⑤2000 円以上

C-3　あなたの行ったボランティアの内容は何ですか（1 つだけ○を付けて下さい）。
①授業での指導補助　②放課後学生チューター
③放課後の部活動指導補助　④特別支援教育補助
⑤中学生対象の自学講座　⑥適応指導補助
⑦子供図書室運営　⑧学校行事のサポート
⑨学校安全対策　⑩その他（具体的に）

C-4　上の質問 C-3 の回答が①または②の時の指導教科・領域は何でしたか（複数回答可：3 つまで○を付けて下さい）。
①国語　②社会　③算数または数学　④理科　⑤生活　⑥音楽　⑦図画工作または美術
⑧家庭または技術・家庭　⑨体育または保健体育　⑩英語　⑪道徳　⑫特別活動
⑬総合的な学習の時間　⑭その他　[⑭の方は質問 D へお進み下さい]

C-5　上の質問 C-3 の回答が⑤の時の指導教科は何でしたか（複数回答可：3 つまで○を付けて下さい）。
①国語　②社会　③数学または算数　④理科　⑤英語　⑥その他（具体的に）[質問 D へお進み下さい]

C-6　上の質問 C-3 の回答が③の時の部活指導補助の内容は何でしたか（1 つだけ○を付けて下さい）。
①文化系　②体育系　[質問 D へお進み下さい]

C-7　上の質問 C-3 の回答が⑧の場合は活動内容を具体的に記述して下さい。（注：回答欄は省略）

図２　教育ボランティアの内容に関する質問Ｃ

今回、ボランティアをした感想についてお聞きします。各項目の最も当てはまる番号に○ 印を付けて下さい。（注：回答は１：まったくそう思わなかった ～ ４：とてもそう思った、の４件法によった。以下、回答欄は省略）

D-1　子どもの実態を知る良い機会になった
D-2　子どもを指導するということについて考える良い機会になった
D-3　一定の責任をもって任務に当たるということを学ぶ良い機会になった
D-4　将来、教職に就く気持ちが高まった
D-5　教育関係に限らず、今後も何らかのボランティアに参加しようと思うようになった
D-6　その他、あなたにとって有意義だった点がありましたら空欄に具体的に書いて下さい

図３　教育ボランティア実施後の感想に関する質問Ｄ

E-1　あなたは再度教育ボランティアに参加したいと思いますか。
①参加したい　②参加したくない
E-2　上の質問 E-1 で、「②参加したくない」と回答した人にお聞きします。その理由は何ですか。下の空欄に具体的に書いて下さい。（注：回答欄は省略）
E-3　上の質問 E-1 の回答が、「①参加したい」の時の内容は何ですか（複数回答可：2 つまで○を付けて下さい）
①授業での指導補助　②放課後学生チューター
③放課後の部活動指導補助　④特別支援教育補助
⑤中学生対象の自学講座　⑥適応指導補助
⑦子供図書室運営　⑧学校行事のサポート
⑨学校安全対策　⑩その他（具体的に）
E-4　あなたの参加した事業に不足していると思うことは何ですか（複数回答可：2 つまで○を付けて下さい）。
①ボランティア内容に関する事前の情報　②休憩所の確保　③交通費の支給
④適切な指導者　⑤その他
E-5　上の質問 E-4 の回答が「⑤その他」の人は具体的に記述して下さい
E-6　その他、ご意見があれば自由にお書き下さい（注：回答欄は省略）

図４　教育ボランティアの継続の意思の有無に関する質問Ｅ

結果と考察

質問Ａについて

83 名の回答者の所属は教員養成を主目的とする学校教育課程の学生が 78 名，教育人間科学部の他の課程に所属する学生が２名であった．残る３名は科目等履修生２名，他学部の学生１名であった．学年の内訳は，１年生～４年生がそれぞれ 19 名，24 名，16 名，21 名であった．また，大学院生，研究生，無回答者が各１名であった．３年生の数が少なかったのは，この学年で教育実習があるため時間の制約があったためと考えられる．性別では男性が 20 名，女性が 63 名であり，教育人間科学部の男女の比率に比して，女性の参加が多かった．

質問Ｂについて

各項目の評定値をそのまま点数化した上で平均値と標準偏差を求めた．結果は 表１ に示す通りである．

教育ボランティアに参加した動機としてどの項目が重視されているのかを探るために，項目間の平均値の差について分散分析を行った．項目間の差は有意であった（$F\ (7, 574) = 88.4, p < 0.01$）．Fisher の PLSD による多重比較の結果は，項目１と項目２，５，６，７，８との間に有意差が認められ，いずれも項目１の値が高かった．また，項目２と項目３，４，６，７，８の間にも有意差が見られ，項目３と項目４は項目２よりも高く，項目６～８は項目２よりも有意に低かった．項目３と項目４～８の間にも有意差が認められ，項目４のみが項目３よりも高かったが，他の４項目は項目３よりも低かった，更には，項目４と項目５～８の間にも有意差が認められ，いずれも項目４の値が有意に高かった．項目５と項目６～８の間にも有意差が見られ，項目５が有意に高い値を示した．

このように「子どもと接することが好きだから」「将来，教職を希望しており，その役に立つと思ったから」「子どもに教えるという経験をしてみたかったから」という項目の評定値が高く,「大学教員から今回のボランティアをするよう勧められたから」「単位が取得できるから」といった外発的動機に基づく項目の値は低い．また，それら２項目の値自体も「1:まったくそう思わなかった」と「2:あまりそう思わなかった」の中間の否定方向の値を示している．このことから，教育ボランティアが内発的動機に基づく本来のボランティアとして機能していることが分かる．

なお，その他として自由記述で挙げられたのは，選択肢と重複する内容をより詳細に記したものが多かったが,「小学校と中学校のどちらの教員になるか悩んでおり，どちらに向いているか見極めたかった」「教員採用試験に合格済みで，不安な部分を解消したかったから」とする記述もあった．前者の適性を見極めたいという回答からは，教育ボランティアが進路決定に資する経験になり得ることを示すものである．

表１　質問Ｂの各項目の平均評定値と標準偏差

項目	平均値	標準偏差
１．将来，教職を希望しており，その役に立つと思ったから	3.65	0.57
２．教員採用試験に有利になるかもしれないと思ったから	2.61	0.92
３．子どもに教えるという経験をしてみたかったから	3.48	0.76
４．子どもと接することが好きだから	3.87	0.44
５．内容はともかく，何かボランティアをしたいと思ったから	2.76	0.77
６．時間をもてあましていたので，何かしようと思ったから	2.12	0.93
７．大学教員から今回のボランティアをするように勧められたから	1.92	1.05
８．単位が取得できるから	1.92	0.98

質問Ｃについて

ボランティア先までの主な交通手段について問うた質問Ｃ-１では，回答が多い順から自動車 27 名 (32.5 %)，自転車 25 名 (30.1 %)，公共交通手段 12 名 (14.5 %)，バイク 11 名 (13.3 %)，徒歩 7 名 (8.4 %)，無回答 1 名 (1.2 %) となった．山梨県の公共交通機関の状況を考慮すれば，公共交通機関の利用が少ないことに納得できる．しかし，このことは同時に，自動車を持たない者や運転免許証自体を持たない者にとっては，ボランティアの意向をもちながらもそれが実行に移せない場合のあることを示唆する結果でもある．ボランティア先までの往復の必要経費 (質問Ｃ-２) については，３名の無回答者があった．回答した者のうち，０円，500 円未満，500~1000 円の順で多く，それぞれ 37 名

(46.3 %)，30 名 (37.5 %)， 9 名 (11.3 %) であった．続いて 1000～2000 円，2000 円以上がそれぞれ 3 名 (3.8 %)， 1 名 (1.3 %) であった．今回のボランティアの受け入れ先には交通費を支給するところもあったが,「社会参加実習」の単位として認めるという性質からは，交通費の補助について大学側も検討する必要があろう．

ボランティアの活動内容 (質問C-３) については， 表２に示す通りであり，子ども図書室の運営，中学生対象の自学講座，授業での指導補助を行った者が多い．このうち，子ども図書室の活動とは，山梨大学が附属図書館に隣接する一室を子ども図書室として１週間に３日地域の親子に開放し，学生が入室の管理や子どもへの読み聞かせをしたり，年に数度の読書に関わるイベントを開催したりするものである．また，中学生の自学講座とは大学に隣接するＢ市の教育委員会の依頼によるもので，土曜日に中学生を公民館に集めて自学する機会を設け，学生がその際の学習を援助するというものである．

質問C-４の授業での指導補助や放課後学生チューターでの指導教科等について，この活動を行った 26 名の回答は，算数・数学が最も多く 25 名，次いで国語 14 名であった．その他に体育・保健体育が４名，理科，音楽，図画工作・美術，英語が各３名，社会科，生活科，家庭科・技術家庭科が各２名，その他が１名であった（回答が３つまでであったため，合計は 26 とならない）．

質問C-５での中学生の自学講座では，この活動を行った 25 名のうち，数学，英語，理科，社会科，国語の順で多く，それぞれ 21 名，16 名， 9 名， 6 名， 5 名であった．その他を挙げた４名の内訳は，いずれもここで設定した５教科のうち，複数教科を行ったとするものであった．上記２つの質問への回答から，教科指導に関係した活動内容では算数・数学の指導が中心となっていることが分かる．

なお，質問C-６について部活動の指導補助を経験したのは２名に過ぎず，いずれも文化系の部活動であった．また，質問C-７に回答した者は１名で，記述内容は「子どもの活動の観察と記録」とあった．その内容の詳細は不明である．

表２　教育ボランティアの活動内容

①	授業での指導補助	21	(25.3 %)	⑥	適応指導補助	0	(0.0 %)
②	放課後学生チューター	5	(6.3 %)	⑦	子供図書室運営	27	(32.5 %)
③	放課後の部活動指導補助	2	(2.4 %)	⑧	学校行事のサポート	2	(2.4 %)
④	特別支援教育補助	0	(0.0 %)	⑨	学校安全対策	0	(0.0 %)
⑤	中学生対象の自学講座	25	(30.1 %)	⑩	その他	1	(1.2 %)

質問Ｄについて

項目１～５の平均値と標準偏差は 表３に示す通りである．いずれの項目においても平均値は「3:少しそう思った」～「4:とてもそう思った」の間の値を示し，学生にとっては意義のある活動であったと感じていることが分かる．項目間の平均値の差について分散分析を行ったところ差は有意であり（$F\ (4, 328) = 4.4, p < 0.05$），多重比較を行ったところ項目１と項目２，４，５の間に有意差が認められ，いずれも項目１の値が高く，学生にとっては子どもを知るよい機会として捉えたようである．本ボランティアが教育実践力を高めることを目的としていることからすれば，項目１，２の値が高かったことは目的を達していることになる．

表 3　教育ボランティア実施後の感想

質問項目	平均値	標準偏差
１．子どもの実態を知る良い機会になった.	3.76	0.48
２．子どもを指導するということについて考える良い機会になった.	3.54	0.82
３．一定の責任をもって任務に当たるということを学ぶ良い機会となった.	3.55	0.69
４．将来，教職に就く気持ちが高まった.	3.40	0.78
５．教育関係に限らず，今後も何らかのボランティアに参加しようと思うようになった.	3.48	0.74

質問Ｅについて

教育ボランティアへの再参加の意思について尋ねた質問Ｅ-１では，参加したいとする者 82 名，参加したくないとする者１名であった．この１名は授業の指導補助を行った学生であり，質問Ｅ-２では再度の参加を望まない理由として「クラスに外国籍の子どもがおり，その子どものみに関わる役割を任されたため，クラス全体と関われなかった」ことを挙げた．つまり，当該の学生は学級という場におけるさまざまな子どもと接することを期待して教育ボランティアに参加したが，特定の子どもとしか接する機会が与えられなかったことを不満に思ったと考えられる．このようなことから派遣先が求める活動内容と，ボランティア学生が望む活動の間に齟齬が生じないように事前に学生に活動内容の詳細を知らせておくことが必要なのかもしれない．

再度，参加したいと答えた 82 名の質問Ｅ-３への回答内容は 表 4 の通りであり，授業の指導補助や子ども図書室の運営を望む者が多かった．その他として挙げられたのは，教室で子どもたちと学習指導の場以外で交流する機会をもちたいとするものであった．

質問Ｅ-３の教育ボランティア事業に不足しているものとして最も多い 22 名 (26.5 %) が挙げたのは「ボランティア内容に関する事前の情報」であり，次いで交通費の支給７名 (8.4 %)，適切な指導者６名 (7.2 %)，休憩所の確保３名 (3.6 %) であった．また，その他の項目を挙げた者が 10 名あった．質問Ｅ-４の自由記述で挙げられた「その他の不足するもの」の内容は「自学講座での教材の充実 (２名)」「自学講座の参加生徒に持ち物や心構えなどについての学校側での指導 (１名)」「自宅の近隣のボランティア先の確保 (１名)」などであった．ただし，39 名がこの質問に無回答であり，多くの者は現状で満足しているといえる．

質問Ｅ-５でその他の意見を記した者は 29 名であった．その内容をアイディアユニットに分けると，「有意義な活動であった (13 名)」,「ボランティアをするよい機会となった (６名)」,「教育現場での活動の単位化の評価 (1 名)」など，ボランティアの意義を述べる者が多かった．その他に，派遣先への謝意や楽しかったとする感想も記された．

一方，少数ではあるが「活動先の校種の多様化 (2 名)」,「派遣先では担当教員だけでなく，他の教員も紹介してもらえると活動しやすかった (1 名)」などの要望も挙げられた．

表 4　今後参加したい教育ボランティア活動

活動名	希望数（%）	活動名	希望数（%）
①　授業での指導補助	29（35.4）	⑥　適応指導補助	4（4.9）
②　放課後学生チューター	7（8.5）	⑦　子供図書室運営	27（32.9）
③　放課後の部活動指導補助	8（9.8）	⑧　学校行事のサポート	14（17.1）
④　特別支援教育補助	14（17.1）	⑨　学校安全対策	3（3.7）
⑤　中学生対象の自学講座	14（17.1）	⑩　その他	2（2.4）

注：２つまでの複数回答のため，合計数は 82 とならない

III　調査 II

目的

学生の受け入れ機関では学生の教育ボランティア活動をどのように捉えたのかについて調査し，今後の教育ボランティアのあり方を検討する資料を得ることを目的とする．

方法

(1) 調査対象者

教育ボランティアの学生を受け入れた 17 の教育関係の機関で，その内訳は小学校７，中学校３，高校と図書館が各２，幼稚園，教育委員会，適応指導教室が各１であった．

(2) 調査内容

郵送法による質問紙調査であり，実施は 2008 年３月であった．質問紙の冒頭で機関名・機関長名・担当者の職名と氏名の記述を求めた．質問内容は 図５～ 図８ に示す４種であった．このうち，質問１では教育ボランティアの受け入れ内容を問うた．質問２では受け入れ先の指導態勢を，また質問３では大学との連絡体制を，質問４では今後の教育ボランティアの受け入れの意向をそれぞれ尋ねた．

結果と考察

質問１について

各機関が受け入れた活動内容について問うた質問１-１では，回答数が多い順から「授業での指導補助」６,「放課後の部活動指導補助」３,「学校行事のサポート」２,「放課後学生チューター」,「特別支援教育補助」,「中学生対象の自学講座」,「適応指導補助」,「子ども図書室の運営」,「その他」が各１であった．その他の内容は，公立の図書館での蔵書整理であった．活動内容と受け入れ機関の関係では,「授業での指導補助」が小学校５，高校１,「放課後の部活動指導補助」は中学校２，高校１であった．また,「学校行事のサポート」は小学校と幼稚園で各１,「放課後学生チューター」と「特別支援教育補助」はいずれも小学校で各1,「子ども図書室の運営」は大学の附属の図書館,「中学生対象の自学講座」は教育委員会,「適応指導補助」は適応指導教室であった．

1-1　教育ボランティアの内容は何でしたか（該当の番号に１つ○を付けて下さい）
①授業での指導補助　②放課後学生チューター
③放課後の部活動指導補助　④特別支援教育補助
⑤中学生対象の自学講座　⑥適応指導補助
⑦子供図書室運営　⑧学校行事のサポート
⑨学校安全対策　⑩その他（具体的に）
1-2　教育ボランティアを募集した目的を記述して下さい。（注：回答欄は省略）
1-3　学生ボランティアによる効果はありましたか（該当の番号に○を付けて下さい）。
（注：選択肢は１：まったくそう思わない～４：とてもそう思う）
1-4　質問 1-3 で１または２に○をつけた場合だけお答え下さい。
その理由は何が考えられますか。（注：回答欄は省略）
1-5　学生の活動は適切でしたか（該当の番号に○を付けて下さい）。
（注：選択肢は１：まったくそう思わない～４：とてもそう思う）
1-6　質問 1-5 で１または２に○をつけた場合だけお答え下さい。
その理由は何が考えられますか。（注：回答欄は省略）

図５　受け入れた教育ボランティアの活動内容に関する質問１

2-1　学生ボランティアに対する事前指導についてお尋ねします。
指導は①毎回行った　②必要に応じて行った　③1回目のみ行った　④全く行わなかった
2-2　学生への活動中の指導についてお尋ねします。（注：選択肢は質問 2-1 と同様）
2-3　学生への事後指導についてお尋ねします。（注：選択肢は質問 2-1 と同様）
2-4　学生ボランティアの活動記録についてお尋ねします。
①毎回記録している　②必要に応じて記録している　③全く残していない

図６　受け入れ先の指導態勢に関する質問２

3-1　大学との連絡体制について伺います。①適切である　②不十分な点がある
3-2　3-1 で不十分な点があると答えた方だけにお尋ねします。
どのような点が不十分でしょうか。（注：回答欄は省略）

図７　大学との連絡体制に関する質問３

質問１-２のボランティアを募集した目的をまとめる.「授業での指導補助」では,「きめ細かい指導を通して児童の学力向上に役立てるため」「基礎学力の向上のため」「理解に時間のかかる子，集中できない子への個別指導のため」「学習につまずきのある児童や発達障害の児童へ支援のため」などであった.「放課後学生チューター」では「できるだけ多くの生徒のニーズに応えるため」,「放課後の部活動の指導補助」では「専門的な技術を持つ教師がいないため」「教師が忙しい日があるため」などであった.「特別支援教育補助」では「指導体制の充実と学生への教育の機会の提供」であり,「中学生対象の自学講座」では「生徒の学習の機会を多くし，学生にも中学生に触れる機会を提供するため」とした．また,「適応指導補助」では「通室する子どものメンタルフレンドとして学習・生活面での指導の役割と学生ボランティアの機会の提供」を挙げた.「学校行事のサポート」では「集団に適応しにくい児童への個別支援」などであった.「子ども図書室の運営」では「学生ボランティアの機会の提供のため」とした.「その他」の図書館の蔵書整理では「開かれた図書館の運営を目指し，ボランティア希望者に活動の場を提供するため」とした．合計５つの受け入れ先で，学生の学習の場の提供を挙げた．すべてではないにせよ，この事業の趣旨が受け入れ先と合致している．

4-1　今後の教育ボランティアについてのご意見をお聞かせ下さい。今後、教育ボランティアを採用する予定はありますか。①はい　②いいえ

以下は 4-1 で「①はい」と答えた方だけご記入下さい。「②いいえ」と答えた方は 4-8 へお進み下さい。
4-2　今後、受け入れたい内容は何ですか（複数回答可：３つまで〇を付けて下さい）。
①授業での指導補助　②放課後学生チューター
③放課後の部活動指導補助　④特別支援教育補助
⑤中学生対象の自学講座　⑥適応指導補助
⑦子供図書室運営　⑧学校行事のサポート
⑨学校安全対策　⑩その他（具体的に）
4-3　受け入れたい学生の人数についてお尋ねします。1 日の活動で実数としては何名ですか。
（　　）人
4-4　受け入れたい時期について該当の番号に〇を付けて下さい。
①年度当初から　②学期単位で　③必要に応じて
4-5　受け入れたい期間についてお尋ねします。
①1 週間程度　②1ヶ月程度　③3ヶ月程度　④6ヶ月程度　⑤1 年程度　⑥不定期（実態に応じて）
4-6　学生がボランティアに行く往復経費（1 人あたり）を貴組織は負担できますか。
①できない　②500 円まで　③500～1000 円　④1000～2000 円　⑤2000 円以上可能
4-7　今後の課題や、その他お気づきのことがありましたらご自由にお書き下さい。（注：回答欄は省略）

以下は 4-1 で「②いいえ」と答えた方だけご記入下さい。
4-8　教育ボランティアを受け入れたくない理由をお書き下さい。（注：回答欄は省略）

図 8　今後のボランティアの受け入れ意向に関する質問４

教育ボランティアの効果を尋ねた質問１-３では回答数が少ないため，肯定 (3:少しそう思う，4:とてもそう思う) と否定方向 (1:まったくそう思わない，4:あまりそう思わない) の回答に分類して集計した．その結果，効果があったとする肯定方向の回答 16，なかったとする否定方向の回答１であった．学生の活動が受け入れ機関にとっても効果があったことを示す値である．否定した回答の質問１-４での回答内容は，学生の都合とボランティアの活動時間が合わなくなったことを挙げた．

質問１-５では２つの機関で否定方向の回答があった．質問１-６の挙げられた理由は,「途中から来なくなった」「学生の都合と一致せずにほとんど活動がなかった」ことを挙げた．

質問２について

事前指導の実施 (質問２-１) では,「毎回」４,「必要に応じて」10,「１回のみ」３となった．活動中の指導 (質問２-２) については,「毎回」１,「必要に応じて」14,「１回のみ」と「無回答」各１であり，事後指導 (質問２-３) は,「毎回」２,「必要に応じて」13,「まったく行わない」と「無回答」が各１であった．活動について必要に応じた指導が行われていることが示唆される．教育ボランティアの活動記録 (質問２-４) では「毎回記録している」９,「必要に応じて記録している」７,「全く残していない」１であった．

質問３について

質問３-１で尋ねた大学との連絡体制の評価については,「適切である」13,「不十分な点がある」４であった．不十分だとの回答の理由は，手続き先が不明であるとするものや学生への連絡がつきにくいとするものであった．前者の回答を寄せたのは，学生が自主的に見つけてきた受け入れ機関であり，教育ボランティア制度についての理解が不十分であったためだと考えられる．今後，手続きの周知を徹底しておく必要がある．

質問４について

まず，質問４-１では１つを除く16の機関が今後も受け入れたいと回答した(したがって，以下の質問４-２～４-７までの回答数は16となる)．また，その活動内容(質問４-２)は,「授業での指導補助」７,「放課後学生チューター」と「学校行事のサポート」各６,「特別支援教育補助」４,「放課後の部活動指導補助」と「適応指導補助」各３,「中学生対象の自学講座」２，その他１であった(複数回答であるため合計数は16とならない)．この結果は，今回実施した活動の他にも各機関が学生ボランティアに期待する活動が多いことを意味している．受け入れ学生数(質問４-３)は，活動内容によってバラツキが見られたが，最もニーズが高い「授業での指導補助」では各クラスに１名配置したいという要望が多かった．受け入れ時期(質問４-４)は,「年度当初から」と「学期単位で」を合わせて９機関,「必要に応じて」が７機関であった．受け入れ期間(質問４-５)については,「１年間」８,「不定期(必要に応じて)」５,「６ヶ月」「３ヶ月」「１週間」が各１であった．年間の指導計画にこの活動を位置づけようとしているのではないかと考えられる．

質問４-６の負担可能な交通費は,「負担できない」11,「500～1000円」と「1000～2000円」が各２，無回答が１であった．負担できないとしたのは学校が多い．

今後の課題等について自由記述を求めた質問４-７では，個別的な意見や感想が多かった．このうち，今後の教育ボランティア活動を改善する際の参考になると考えられるのは,「学生の目的も意識した内容を構成したい」「部活動の指導補助の場合，県外での大会に参加するときの交通費を自校でも考えるが，大学の方でも考えてほしい」「学生への連絡体制の確立」である．なお，質問４～１でボランティアを募集しないとしたのは本学の子ども図書室であり，質問４-８で大学の別のボランティア活動に位置づけられることを理由に挙げた．

IV　全体の討論

ここでは２つの調査結果を概観しながら，今後の教育ボランティア事業のあり方を考えていきたい．まず，教育ボランティア実施後の学生の感想を問うた質問Dのいずれの項目でも評定値は高く，多くの学生が有意義であったとしている．特に，子どもの実態を知る機会であると捉えたり，子どもの指導について考える機会になったりしたと捉えている者が多かった．また，教職に就く気持ちを高める効果も期待できることが示された．これらは教育ボランティアの独自の効果といえる．また，責任をもって任務に当たるということを学ぶ機会になったという項目の値が高かったことは，インターンシップの機能ももつことを示唆する．更には，他のボランティアへの参加意欲も喚起したことから，大学側でこのような機会を設けることは，消極的と評される現代の大学生にとって必要なことであると考えられる．

一方，受け入れ側でも質問１-３で17機関のうち，16機関で効果があったとする肯定方向の回答をしており，学生，受け入れ側の両者にとって有効な活動となり得ていることが示された．

「教育ボランティア」は正規の授業「社会参加実習」として単位化された．先に述べたように，このことについてはボランティアという性質に馴染まないのではないかという議論もあった．しかし，単位取得が動機であったかについて尋ねた質問Ｂ-８での評定値の平均は低く，また「とてもそう思った」と回答した者は83名中の４名 (4.8％) に過ぎない．更には，仮に単位を目的にした場合でも，上記の質問Ｄの結果が示すようにボランティア経験によって他のボランティアへの参加意欲を喚起することがある．以上の諸点から教育ボランティアは学生への教育機能を果たしていると考えることができる．

ただし，幾つかの検討すべき点も明らかになった．まず，教育ボランティアは教育の場でもあるという点についてである．受け入れ機関に教育ボランティアを募集した目的を尋ねた質問１-２の回答の中には，学生の教育の場を提供したい旨の記述も複数あった．しかし，今後の課題について記述を求めた質問４-７において１機関だけではあるが，自機関の活動にとって都合の良い学生を大学側で厳選して派遣するよう要求する回答があった．これは本来の教育ボランティアの趣旨からは外れる．今後，学生の派遣に当たっては学生の教育の場であることを事前に受け入れ機関に周知する必要がある．

次の検討すべき点として，学生の授業等と教育ボランティアの活動の時間の摺り合わせの問題が挙げられる．教育ボランティアの効果を尋ねた質問１-３で否定した１機関は，学生の都合がつかずにほとんど活動しなかったことをその理由として挙げた．また，受け入れ時期 (質問４-４) と受け入れ期間 (質問４-５) についての質問では，受け入れ機関は学年または学期の始めから比較的長期間のボランティアを望んでいる．これらのことを考え併せれば，大学の授業で時間の制約を受ける１，２年生は不定期で短期間の活動への派遣を，３，４年生は定期的で比較的長期に渡る活動に派遣することも考えていかなくてはならない．

３つめの点として交通費の問題がある．受け入れ機関のうち特に学校では交通費の支出は困難だとの回答が多かった．先にも述べたように，大学では単位化に伴い交通費の保障は考えていかなくてはならないが，受け入れ機関の側でも教育活動の一環として位置づける意向をもつのであれば一定の予算を組むことを検討する余地はあるのではないだろうか．今後，受け入れ機関と大学で協議を行っていきたい問題である．

以上に，山梨大学教育人間科学部で実施されている教育ボランティア活動の実態と今後の課題について述べてきた．受け入れ機関にとっても学生にとっても意味をもつ活動であり，継続する意義のある活動であることが検証できた．その一方で，幾つかの問題点も明らかになった．今後それらの問題を解決し，より充実した教育ボランティア活動を展開していくことが教員養成系の学生の実践力の向上に繋がると考えられる．

参考文献

[1] 仏教大学 2007 公立学校を起点とする小大連携プロジェクト，文部科学省「質の高い教員養成プログラム」事業 平成17～18年度最終報告書

[2] 盛岡大学 2007 教育コミュニティによる実践力の養成と評価-異学年クラスと教育拠点校との連携-，平成1718年度 文部科学省教員養成ＧＰ事業報告書

付記

本研究は，平成 19 年度山梨大学戦略的プロジェクト (地域連携) の「教員志望学生による小中学校への支援事業」の一環として行われた.